ISSN:0918-7936

No. 30 (May 2018)

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

日本ギャスケル協会ニューズレター

ご挨拶

木村　晶子
（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

日本ギャスケル協会創立 30 周年というおめでたい年に、思いもかけず会長職を務めさせていただくことになりました。謙遜ではなく、非力な私にはあまりに重いお仕事に感じますが、何とか皆様のお力をお借りして協会の発展に力を尽くしたいと思っております。

個人的なことになりますが、そもそもギャスケルという名前を知ったのは早稲田大学第一文学部の学生だった時で、非常勤講師としてご講義なさっていた山脇百合子先生のイギリス小説の授業からでした。ご講義は毎回異なった作家を紹介する興味深いもので、特にギャスケルの回は熱がこもっていた記憶があります。当時はギャスケル夫人という呼称が一般的で、『メアリ・バートン』などで労働者階級を描いた作家として紹介なさいました。ところがヴァージニア・ウルフやＴ・Ｓ・エリオットなどに傾倒していた大学時代の私は、生意気にも（今振り返るとぞっとしますが）ヴィクトリア朝小説をモダニズム文学より芸術的に劣ると考えており、まじめにギャスケルの作品を読もうとしませんでした。仕方なく読んだジェイン・オースティンの小説の良さもわからず、ハッピーエンド（しかも結婚という結末！）を軽蔑していたのを思い出します。

転機は、家族をもって育児という現実に直面した時に訪れました。ヴァージニア・ウルフで修士論文を書いた後、博士課程ではＤ・Ｈ・ロレンスを研究していたのですが、子供（しかも複数）という圧倒的な存在によって、〈アイデンティティの追求〉も〈分裂する自我〉も遠ざかりました。不確定な生の意味を問うどころではなく、しばしば近所の子供たちも狭い自宅にひしめき合う中、子供の怪我や病気のない月があれば感謝する日々になりました。読書の時間もわずかな中で、オースティンの深いユーモアや皮肉にようやく気付き、遅ればせながら 19 世紀の小説の素晴らしさ、豊かさに目覚めたと言えます。そのような時に出会ったのが、小池滋先生訳の岩波文庫の『女だけの町――クランフォード』で、なんとも魅力的な世界が描かれていると感じ、それからギャスケルの作品を本格的に読み始めました。

ギャスケル協会とのご縁は、お茶の水女子大学大学院の会誌に書いたギャスケルに関する論文をたまたま第二期会長の鈴江璋子先生がご覧になり、1990 年頃かと思いますが、協会に勧誘してくださったことから始まりました。山脇百合子先生が会長となられて創立した学会自体も、ギャスケルの作品のような穏やかな温かさがあって和やかな雰囲気でした。その後、邦訳作品が少ないことから、全集発行の企画が役員会で出され、短篇の「灰色の女」を訳させていただいたのも懐かしい思い出です。現在では学会活動に参加なされなくなった数々の先生方のお力で、ギャスケル研究が長年にわたって続けられてきたことを思うと、感無量です。この 30 年間にギャスケル研究は国内外でますます盛んになり、全集以外にも会員の方々によって多くの研究書が出版されてきたのは皆様ご存知のとおりです。

本来なら、このあたりで会長としての抱負を語るべきですが、何よりもすべきことは学会の財政面の見直しであることがわかってきました。このところ年々繰越金は減少しており、これまでどおりの予算設定を続けると数年後には非常に危機的な状況を迎えることが予想されます。前会長・前事務局長のご尽力によって様々な経費削減策がとられてきましたが、少子化に加えて英文学専攻の学生が激減する状況のもとでは、さらなる改革が必要となります。会費を値上げしない限り収入減少が予想されますが、値上げすれば会員の負担が増え、一層の会員減を招く恐れがあるので避けるべきでしょう。ですので、今後はウェブの活用など、なんとか少しでも支出を減らす方法を考えざるを得ません。会員の皆様にご不便をかけない方法を模索するつもりですが、どうかこうした学会の財政状況をご理解くださいますようお願いする次第です。

なお、今秋の 30 周年記念大会は早稲田大学で開催予定ですが、宇田和子先生のお力によってクイーンズランド大学の Dr. Lesa Scholl に招待講演を引き受けていただくことになりました。ぜひ、おひとりでも多くの会員の方々やご友人に参加いただき、有意義な時間を共有できたらと思います。また、大野龍浩先生にお骨折りいただき、本協会の出版事業を長年支えてくださっている大阪教育図書株式会社様からギャスケル協会 30 周年記念論集の出版も予定されています。大変ありがたく存じます。

今期は副会長を松岡光治先生、事務局長を木村正子先生にお願いし、すでに両先生には多大なご助力をいただいています。また、大学教員の勤務が苛酷になる中、役員をお引き受けくださった先生方には感謝の念で一杯です。会員の皆様におかれましては、今後とも学問の喜びを分かち合いつつ協会の発展にお力をお貸しくださいますよう、心からお願いいたします。

◆◆◆新刊紹介 (2017 年度)◆◆◆　（掲載情報は 2018 年 3 月 15 日までに報告されたものです。）
ジェイン・オースティン著　大島一彦訳『高慢と偏見』（中公文庫）
神戸大学英米文学会・編　石塚裕子ほか著『教養主義の残照――*Kobe Miscellany* 終刊記念論集』（開文社）
鈴江璋子著『まぼろしを地図にして』（開文社）
森 有礼ほか編著、矢次 綾ほか共著『路と異界の英語圏文学』（大阪教育図書）
矢野奈々著『ダーク・ヒロイン――ジョージ・エリオットと新しい女性像――』（彩流社）
＊新刊書の情報を事務局（mkimura@gifu-cn.ac.jp）までお寄せ下さい。締切は 2019 年 3 月 15 日です。

第 29 回例会レポート
日　　時：2017 年 6 月 3 日（土）午後 2 時から
会　　場：TNP 大宮駅西口カンファレンスセンター
開会の辞：日本ギャスケル協会会長
　　鈴木　美津子（東北大学名誉教授）
研究発表：司会　矢次　綾（松山大学教授）
1. 「『クランフォード』と訳述《克欄弗》の比較を通じて見るヴィクトリア朝文化と五・四新文化運動」
　　劉　熙（関西学院大学大学院生）
2. 「食から探る『クランフォード』」
　　宇田　和子（埼玉大学名誉教授）
講　　演：司会　木村　晶子（早稲田大学教授）
「『ルース』の表層と深層　――「更生」から「救い」へ――」
　　鮎澤　乗光（元東京女子大学教授）
閉会の辞：日本ギャスケル協会副会長　　大島　一彦（早稲田大学教授）

（撮影：大野龍浩）

研究発表
1.『クランフォード』と訳述《克闌弗》の比較を通じて見るヴィクトリア朝文化と五・四新文化運動
20 世紀の初頭、数々の欧米文学作品が翻訳され、中国に導入された。『クランフォード』(1851-53)もまたそうした流れの中で、三回の翻訳が行われている。作品の中で、ジェンキンズとブラウン大佐が、ジョンソンとディケンズの文学に対して示す対照的な態度は、中国の近代化に大きな役割を果たした五・四新文化運動と近似した文化的変遷を映し出している。本発表では、1927 年に伍光建によって訳述された《克闌弗》と原作とを比較し、中国における訳述の特徴を検討しながら両者の相違点を分析した。それにより、新大衆文化に軽蔑的な態度をとったジェンキンズの人物像が歪曲され、中国の読者に提示されていたことを明らかにした。と同時に、原作において旧来の文化観が決して棄却されるのではなく、テクストに描き出される新時代の要素と共存させられているという事実を見出した。こうして、『クランフォード』が二つの社会の変革期

においてどのような異なる関連を有していたかを、比較を通して明らかにした。同時に、ギャスケル小説の両義的な性質について新たな洞察を導き出した。（劉　熙）

2. 食から探る『クランフォード』

本発表では、作品の流れに沿いながら、食品・料理品・食事作法などの詳細を検討した。例えば、cowslip wine や elder-wine の作り方、seed-cake と Savoy biscuit の違い、"lion couchant"型で作られたプディングが表すもの、Matty がどうして緑茶を売りたがらなかったのか、Mr Holbrook のディナーにおける料理サーヴィスの順番やフォークやタバコなどである。すると浮かび上がって来たものは、人々の生活ぶり、作中人物の性格、当時の社会問題、時代の変化、食品や料理にまつわる歴史等、作品の深層と広範な作品背景であった。そして作品深層や作品背景を総合すれば、ギャスケルが述べたかったこと「クランフォードの人々は、古くからの平和と親切の心情を活かしつつ、資本主義進展や工業化、父権性の弱体化といった時代の変化を取り込んで、一歩進んだ"old friendly sociability"を創生している」ことが、明示されていた。食べることは、現実の人が生きて行く上で欠かせない。そしてまた、食べることは、文学作品を賞味するための要の一つなのである。

（宇田　和子）

講演：「『ルース』の表層と深層――「更生」から「救い」へ――」

ギャスケルの小説では、社会的要素を描く表層の下に、宗教的な罪と救いなどの個人的要素が深層部として内在しているという深い洞察をもとに『ルース』を掘り下げたご講演であった。表層と深層は細密に絡み合い、しばしばある結節点で劇的展開を遂げ、深層が表層に取って代わるが、『ルース』においては「堕ちた女」の悲劇による社会批判の表層から、ルース個人の信仰、罪と試練、救済という深層へと作品の中心が移るのである。『メアリー・バートン』でも労資対立の状況下での労働者の現実を描く社会的要素から、殺人を経て、個人の試練という私的要素へと焦点が変わってゆく。また、『ルース』を意識して書かれたと思われる『テス』には『ルース』との類似点も多いが、終始ハーディがテスを犠牲者として描いたのと違って、ギャスケルは最初からルースの罪を認めており、社会の二重規範を批判しつつも宗教的次元の更生と救いに焦点を当てている。数々の英国小説を鋭く分析なさってきた鮎澤氏ならではの議論は、改めて小説を読むことの豊かさを実感させるものであった。（木村　晶子）

「例会に参加して」

鈴木美津子会長の挨拶で幕を開けた第 29 回日本ギャスケル協会の例会は、TKP 大宮駅西口カンファレンスセンターにて、初めての大宮の開催となった。

研究発表は矢次綾氏の司会で始まった。一人目は劉熙氏（関西学院大学大学院生）の「『クランフォード』と訳述≪克闌弗≫の比較を通じて見るヴィクトリア朝文化と五・四新文化運動」と題するもので、20 世紀初頭の中国で活発に行われたギャスケルの翻訳の中で、伍光健が 1927 年に翻訳した『クランフォード』≪克闌弗≫について日本語で発表された。中国では、翻訳に訳者の解釈が加えられる傾向にあり、人物も作品通りに訳されていないこと、また、近代化を推進する中国の五・四新文化運動がヴィクトリア時代に重なり、中国で『クランフォード』が受容されたことを劉氏は指摘した。中国語、英語、日本語に堪能な劉氏ならではの、貴重な発表であった。宇田和子氏（埼玉大学名誉教授）の題目は「食から探る *Cranford*」であり、『クランフォード』の社交界を食文化から分析するものであった。オールド・メイドたちの社交パーティーに紹介されている食材を分析すると、階級や富裕度に至るまで分かってしまうという考察に加え、ギャスケルの食への知識が作品を豊かにし、読者を『クランフォード』の優しい社交界に誘っていることを述べられた。宇田氏の発表中、聴衆はパーティーの主催者、あるいは参加者の一人であるかのような気分を味わうことができた。

講演は、木村晶子氏の司会で、鮎澤乗光氏（元東京女子大学教授）が「『ルース』の表層と深層――「更生」から「救い」へ――」と題して、『ルース』は労働者と資本家などを描いた社会小説としての表層部を持つが、深層部分では、宗教小説としての転換が起こっていることを述べられた。最後にルースが死に際で "I see the Light coming," と述べる場面では、魂の救済がなされたこと、加えて、ルースが失われたイノセンスを取り戻していく様子が読み取れることを力説された。この、神のもとへ返っていくルースにこそ、それまでの作品にはなかった深層部が存在するというもので、ルースの精神の昇華を深く考察された講演であった。

最後に、大島一彦氏による閉会の辞で閉会となった。例会終了後のパレスホテル大宮で行われた懇親会は、劉氏、宇田氏、鮎澤氏を囲み、3 名の発表・講演の余韻に浸りながら、和やかな楽しいひと時となった。

（日本赤十字看護大学専任講師　遠藤　花子）

第 29 回大会レポート

日　　時：2017 年 9 月 30 日（土）午後 1 時より
会　　場：熊本大学　くすの木会館 1 階
開会の辞：日本ギャスケル協会会長　鈴木　美津子（東北大学名誉教授）
シンポジウム：「群衆との対峙 ――ヴィクトリア朝の小説における都市の風景――」
　司会・講師　市川千恵子（茨城大学教授）
　講師　木村　正子（岐阜県立看護大学専任講師）
　講師　伊藤　正範（関西学院大学教授）

総　　会：総合司会　事務局長　　石塚 裕子（神戸大学教授）
講　　演：司会　大島　一彦（早稲田大学教授）
「ヴィクトリア朝小説の／を覗き見」　高橋　和久（東京大学名誉教授）
閉会の辞：日本ギャスケル協会副会長　大島　一彦（早稲田大学教授）

（撮影：大野龍浩）

シンポジウム「群集との対峙――ヴィクトリア朝の小説における都市の風景――」

本シンポジウムは近代小説における群衆を都市の症候として捉え直し、ギャスケルの作品を起点に、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて出版された小説へと視野を広げ、群衆の有する革新性と反近代的な祝祭性を検証した。個人・社会が群衆に対峙する様相を考察したうえで、群衆が公衆へと変換する瞬間を提示することを試みた。（市川　千恵子）

「「閉じられた群衆」から「開かれた群衆」へ――ギャスケル作品における女性たちの群衆体験」

本発表では、ル・ボン、タルド、カネッティによる群衆論をもとに、ギャスケル作品における 3 タイプの群衆形態およびその表象について議論した。総じてギャスケル作品にとって群衆は否定的な側面を持つ存在であるが、それは、各登場人物たちが互いの顔を認識できる関係を結び、対話を重要視するからである。労働者群衆（近代群衆）との対峙では、群衆化が人間性の喪失と破壊行動に繋がるため、女性の教育による男性の意識改革を行い、新しい労資関係が提案されている点を論じた。続いて前近代的な町クランフォードでは、死者の群衆による生者の群衆の支配（二重群衆）の問題を掲げつつ、同時に女主人と召使というもう一つの二重群衆による協働が共同体の秩序維持に貢献する点を明らかにした。そして『妻たちと娘たち』では、選挙民というタルド的「公衆」の存在が予告され、その前哨戦として貴族による町衆の懐柔を率先するのが女性たちである点に注目した。いずれの場合も、均質的な「閉じられた群衆」が人々を分断し階層化するのに対し、ギャスケルは、「開かれた群衆」への変容によって、多様性のある集団／共同体を目指し、女性たちの力で問題解決の糸口を見出す点を強調した。（木村　正子）

「傍観者から参加者へ――女性・暴動・ストライキ」

本発表では、小説に描かれる暴動とストライキにおける女性の周縁化から、『北と南』のマーガレットの血が象徴する境界侵犯を経て、参加者となる瞬間までをギャスケルの産業小説とマーガレット・ハークネスのスラム・フィクションとレポルタージュにおける女性と労働の表象から考察した。まず、ギャスケルの『メアリ・バートン』と『北と南』における群衆と暴動の様相を検証したうえで、ハークネスが『失業』 (1888) と『ジョージ・イーストモント』 (1905)において描いた労働者の権利と自律的な生を回復するための抵抗、そうした動きを抑圧しようとする公的暴力の様相、つまり、個人、あるいは集団としての政治的欲望の緊張関係を提示した。ギャスケルとハークネスの小説に共有されているのは、家父長的なアレゴリーであり、両者が描く暴動の場面では、階級構造は前景化される。暴動の場で生じた共同性は即時的なものにすぎず、近代の市民主体の主権性、言い換えれば、抑圧されない欲望に潜む幻想を形象化している。しかし、こうした抑圧に抵抗するのが、ハークネスが小説とレポルタージュで描く女性工場労働者である。『北と南』において自らの侵犯行為を政治的想像力によって正当化するヒロインの理性と政治実践力は、搾取・抑圧・周縁化という暴力に抗う労働者女性に継承されるのである。（市川　千恵子）

「「群衆の時代」へ――19 世紀イギリス小説における群衆表象の変遷」

『北と南』において暴徒化しかけた労働者の群衆は、ソーントンを守るべく立ちはだかったマーガレットの血を目にして「恥じ入」り、鎮静化する。ここでの群衆コントロールは、転倒したジェンダー関係が回復

されるプロットへのすり替えを通して達成されるが、それによって、テクストの語りは労働運動の群衆が内包する政治性に直面することを回避しているように見える。

19 世紀後半における労働運動の大規模化と成功を経て力を増した現実世界の群衆は、さらにジャーナリズムを媒介として結び合わされた「新世代の群衆」へと発展していく。そうした中、小説と群衆の関係にもさらなる変化が生じる。コンラッド『ナーシサス号の黒人』では、理想的な労働者としての保守的かつロマンティックな船員たちのイメージは、物語の最終盤、舞台がロンドンに移ると同時にアイロニーの歯牙へと供される。彼らを取り囲む匿名で不定形の、しかしながら膨大で圧倒的な都市の群衆を前に、フィクションは自らの語りを転覆するに至るのである。

そうした都市の群衆は、ハーディー『日陰者ジュード』、さらにはコンラッド『密偵』において、ときに新聞読者としての大衆と重なり合いながら、伝統的なフィクションの語りが〈個〉の生に対して向けてきた関心を、気まぐれな無関心をもって解体していく。（伊藤　正範）

講演：「ヴィクトリア朝小説の／を覗き見」

高橋氏は冒頭、P.ブルックスのテクストに触れながら、小説を読む行為は性的な欲望と好奇心から異性の肉体を覗かうとする行為に似たところがあると云ふ。勿論この「肉体」は譬喩で、小説を読む悦びは他人の人生或は生活を覗き見するといふきはどい快感にあるといふ意味である。W.ベンヤミンに云はせれば、小説は「乾いた材料」であるところが味噌で、読者の興味といふ炎によく燃える。現実の生身の人間は水分を含んだ存在であるから、好奇心の炎を向けてもさう簡単には燃えない、つまりその本心を容易に覗き込むことは出来ない。以下氏は、M.E.ブラドンの『オーロラ・フロイド』と W.コリンズの『白衣の女』を「覗」き、作中、召使達が主人の生活を覗かうとしたり、主人公が怪しい人物達の話を盗み聞きしようとしたりする場面を引用紹介、やがて主人の秘密を追及するケイレブ・ウィリアムズから事態の細部に注目しようとするシャーロック・ホウムズに至る流れを辿り、最後は人間の外なる仮面（装ひ）と内なる素面（本音）の問題にまで話を展開し、小説を人間本来の素朴な好奇心に基づいて読むことが、意外に深い人間理解に至る可能性を示唆された。（大島　一彦）

「大会に参加して」

日本ギャスケル協会第 29 回大会は、熊本大学くすの木会館にて鈴木美津子先生の開会の辞によって開幕した。本来は昨年の第 28 回例会が熊本大学の予定であったが、熊本地震の影響で約一年半後の熊本開催となった。当日は今回の大会を見守るかのような良い天気に恵まれた。

今回のシンポジウムのテーマは「群衆との対峙――ヴィクトリア朝小説における都市の風景」で、市川千恵子先生、木村正子先生、伊藤正範先生の三名がパネリストとして発表された。ギャスケル作品においてどのような群衆を見ることができるのか、*Mary Barton*、*Cranford*、*North and South* などを例に挙げて論じられた。そこには女性による群衆化に対する問題解決や、女性の強さと連帯の形を見ることができる。また、群衆の暴動描写には女性が傷つくことによる鎮静化があり、そこでもギャスケルは政治的なことよりもジェンダーの話題へと転換させていく。ギャスケルの作品における群衆のあり方について一石を投じる興味深いご発表だった。

高橋和久先生による講演「ヴィクトリア朝小説の／を覗き見」では、Benjamin の *Illuminations* に触れられ、Braddon の *Aurora Floyd* などギャスケル作品に限らず様々な作品を例に挙げて、その描写から人物たちの隠された本質をどう読み解いていくのかユーモアを交えながらお話しいただき、作品への興味が大変深まるご講演だった。

本大会は副会長の大島一彦先生の閉会の辞によって閉幕した。懇親会は大会会場内にあるくすの木食堂で行われた。九州の地で本大会が行われたことを心より嬉しく思います。今回の大会の開催をご準備くださった先生方に感謝いたします。（熊本大学非常勤講師　齊木　愛子）

日本ギャスケル協会役員会報告

1.　役員会報告

1)　2017 年度第一回役員会（6 月 3 日（土）12:00～13:40、於 TKP 大宮駅西口カンファレンスセンター　ベルヴュ・オフィス 5 階 5D 室）

①「ニューズレター」年号表記について

西暦、和暦の表記混在のため、今後は西暦で統一する。ただし、奥付には「西暦（和暦）」の形で併記。

②『論集』28 号について

・創立 30 周年特集号のエッセイ執筆を鈴江璋子氏、多比羅眞理子氏、小池滋氏、松村昌家氏に依頼する。（2500 字程度）。締切は 6 月末。

・『論集』18 号～27 号までの論文と書評の目次も掲載する旨、確認された。

・投稿規定の改正。投稿時の提出物として、投稿原稿、英文アブストラクト（論文本体が和文の場合）、投稿者情報（氏名、論文タイトル、所属・肩書を日本語と英語の両方で表記したもの）の 3 点を明記する。

③　2016 年度会計報告と 2017 年度予算案について

懇親会を別会計にした方がよいのではという提案があり、了承された。援助した場合は、補助として算入することにする。

④　次期会長選出の手続きについて
・別紙資料に基づいて手続きを確認した。「確認事項」に、4 として最多得票数が同票だった場合、現会長が決裁権を持つ旨を追加する。投票の締め切りは 7 月末頃を予定。選挙管理委員には、多比羅眞理子前会長、鈴木美津子現会長、石塚裕子事務局長が提案され、承認された。
⑤　中・短編小説研究会の運営について
・責任者が多比羅眞理子氏から大前義幸氏に変更する旨の提案があった。また、研究会の補助金を減額したいとの申し出があり、共に了承された。
2)　日本ギャスケル協会第二回役員会（9 月 30 日（土）11:00～12:00　於熊本大学くすの木会館 1 階和室）
①　次期会長選挙の結果について
2017 年度第一回役員会での決定に基づき、役員間で新会長選挙を行い 7 月 28 日、選挙管理委員の多比羅眞理子前会長と鈴木美津子会長、石塚裕子事務局長立合のもと、神戸大学東京オフィスにて開票作業を行なった。投票結果は以下の通り。役員 13 名、有効投票数 13 票。木村晶子氏 9 票、石塚裕子氏 2 票、大野龍浩氏 1 票、松岡光治氏 1 票。役員会では、木村氏を次期会長として推薦し、午後の総会で承認を受けることが了承された。
②　2018 年度からの役員組織について
鈴木美津子現会長から第 16 期着任予定の役員の紹介があった。役員会で承認後、午後の総会で新役員を推薦し､会員からの承認を得ることが了承された｡2018 年度 4 月着任予定の新役員は以下の通りである。会長：木村晶子、副会長：松岡光治、事務局長・英国協会連絡：木村正子、幹事（第 15 期、2016 年 4 月着任、第 16 期、2018 年 4 月再任、30 周年記念委員長：大野龍浩、HP 他担当委員：大前義幸)、(第 16 期、2018 年 4 月着任、大会準備委員長：宇田和子、事務局補佐・「ニューズレター」補佐：遠藤花子、事務局補佐・ML 管理：太田裕子、『ギャスケル論集』編集委員：閑田朋子、「ニューズレター」編集委員：志渡岡理恵、『ギャスケル論集』編集委員：玉井史絵、『ギャスケル論集』編集委員（委員長）：矢次綾)、会計監査（2018 年 4 月着任、足立万寿子、宇田朋子）（五十音順、敬称略)。
③　30 周年記念事業　Dr. Lesa Scholl 招聘について
30 周年記念大会の特別講師 Dr. Lesa Scholl 招聘に関して、宇田和子氏より滞在費、渡航費の寄付という申し出があり、それに伴って、「協会 30 周年記念事業基金」を創設することが了承された。この基金には、宇田和子氏、川上真巳子氏からの寄付と国内旅費相当を組み入れることが提案され、了承された。なお、謝礼は規定通り支出。
④　2018 年度例会と大会について
例会は 2018 年 6 月 2 日（土)、岡山国際交流センターにて開催予定。研究発表は矢次綾氏、榎本洋氏（後に、発表辞退の申し出があった)。研究発表の司会者は金子幸男氏。講演講師は白井義昭氏、講演司会は大野龍浩氏。大会は 2018 年 10 月 6 日（土)、早稲田大学にて開催予定。30 周年記念大会とする。講演講師は大島一彦氏を予定したが、後に体調不良により、辞退の申し出があり、西村美保氏に変更。シンポジウム司会は大野龍浩氏。特別講演講師は Dr. Lesa Scholl、司会は宇田和子氏。
⑤『論集』について
・購入希望者には、送料も含めて 1 部 1,500 円で販売することとする。
・投稿規定の細則 1 の改訂。下線部を追加。「論文執筆者には『論集』5 部と論文の PDF を進呈する。なお執筆者が希望すれば、実費にて抜刷購入可とするが、抜刷の送料は自己負担とする。論文執筆者以外（エッセイや書評など）には、会員の場合は 1 部、非会員の場合は 2 部進呈し、進呈分の送料は協会負担とする。」
⑥　会長選挙規定の見直しについて
現役員のみを候補者として会長を選出する現行規定に関して、見直しを求める意見が出された。審議の結果、継続審議となった。
⑦　その他
・振込票の保存期間は 3 年とする。
・現在 ML には 48 名が登録。新規 ML には利用可能な会員全員に登録してもらう予定。費用や事務局の負担軽減のためにも ML を活用したいが、しばらくは紙媒体と併用になる。
・大会の出欠確認に Web システムを活用する件に関して、次期事務局で検討する。

2.　総会報告

①　次期会長選出結果報告と新役員組織：　2017 年度第一回役員会での決定に基づき、役員間での新会長選挙の結果（7 月 28 日開票)、木村晶子氏を次期会長候補として選出した。役員会は木村氏を次期会長として推薦し、承認された。鈴木美津子会長より 2018 年度からの役員組織（新会長、副会長、事務局長、第 16 期幹事）について説明があり、承認された。詳細は上記第二回役員会報告①と②の通り。
②　会計報告：2016 年度会計および 2017 年度予算案が承認された。
③　30 周年記念事業について：1.『ギャスケル論集』特別号刊行、2. Dr Lesa Scholl 招聘(詳細は上記第二回役員会報告③の通り)、3.記念論文集刊行を計画していることを報告した。　（石塚　裕子）

◆◆◆◆◆日本ギャスケル協会　第 30 回例会の御案内◆◆◆◆◆

日時：平成 30 年 6 月 2 日（土）午後 2 時から　会場：岡山国際交流センター

研究発表：司会　金子　幸男（西南学院大学教授）
1.　「『ルース』における女性労働者の表象をめぐって
——堕ちた女」と「善良な女」——」
西村　美保（名古屋学院大学教授）
2.　「ギャスケルとアン・サッカレー・リッチー」
矢次　綾（松山大学教授）

講　　演：司会　大野　龍浩（熊本大学教授）
「*North and South—Shirley* の再構築」
白井　義昭（横浜市立大学名誉教授）

◆◆日本ギャスケル協会　第 30 回大会　予告◆◆

日時：平成 30 年 10 月 6 日（土）午後 1 時から　会場：早稲田大学
シンポジウム：「「比較」で読み解くギャスケル文学——『協会創立 30 周年記念論集』を語る」
司会・講師　大野　龍浩（熊本大学教授）
講師　未定
講　演：司会　宇田　和子　（埼玉大学名誉教授）
“Take no sugar in your tea”: Ethical Economics in Gaskell’s Novels
Dr Lesa Scholl（University of Queensland）

次年度研究発表を募集しております。お申し込みは 12 月末日までに事務局へメールにてお願い申し上げます。

◆◆◆研究会予定◆◆◆

ギャスケルの中編・短編小説の読後感を自由に語り合い鑑賞する研究会です。今年度は日記、詩、エッセイまで対象を広げ、以下の作品を取り上げる予定です。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

作　品：　2018 年 3 月　“French Life” (1864)
5 月　“Bran” (1853)
7 月　“The Shah’s English Gardener” (1852)
9 月　“The Last Generation in England” (1849)
11 月　“Clopton Hall” (1840)
2019 年 1 月　“Sketches among the Poor: No. 1” (1837)
“On Visiting the Grave of My Stillborn Little Girl” (1906)
3 月　*My Diary* (1923)

日　時：奇数月　第 2 日曜日　午後 2 時～午後 4 時
会　場：実践女子学園桜会館（東京都渋谷区東 1－1－40　TEL: 03-3407-7459）
参加費：300 円（会場使用料として）
※日時、会場の変更がある場合は、日本ギャスケル協会 HP に掲載いたしますので、新着情報を必ずお確かめ下さい。

（長浜 麻里子）

・・・・・・・・・・編集後記・・・・・・・・・・

今回､初めてニューズレターの担当をいたしました。ご執筆くださいました先生方、ご協力くださいました先生方に心より御礼申し上げます。おかげさまで無事に会員の皆様にお届けすることができました。冒頭で木村晶子会長が述べられていますように、経費削減の必要から、今号より校正なしの印刷業者に依頼することになりました。ご理解を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。ご意見やご要望などございましたら、お寄せいただければ幸いです。ニューズレターがより充実したものとなりますよう、微力ながら精一杯努めてまいりたいと存じます。（編集：志渡岡　理恵）

発　行：　日本ギャスケル協会
〒501-6295
岐阜県羽島市江吉良町 3047-1
岐阜県立看護大学　機能看護学領域
木村正子研究室
URL: http://www.gaskell.jp/
e-mail: mkimura@gifu-cn.ac.jp

発行日：　2018 (平成 30) 年 5 月 1 日